

## ■ 研究ノート

## 社会的なものの系譜と統治性・序論

亘 明 志

(京都女子大学現代社会学部教授)

フランスの社会学者ドンズロ (Donzelot 1982) によると、社会的なものは統治のテクノロジーとして発明されたという。とすれば、統治性の水準で社会学の歴史を記述することができるはずである。本稿はそうした試みに着くためのきわめてラフなスケッチである。

統治性はフーコーの中期の概念であるが、奇妙なことに社会的なものが発見され、社会学が誕生した時期についての統治性についてフーコーはほとんど触れていない。社会学が誕生したとされる19世紀がほとんど無視されているのである。したがって、フーコーの方法を社会的なものの水準に置き直して歴史をたどり直す必要がある。19世紀半ば、社会的なものは社会問題として認識され、社会主義思想と近い関係にあったが、やがてそれは近代社会に付きまとう問題として定式化される。20世紀になると、アメリカ社会学の隆盛とともに、様々な要素が挿入される。しかし、社会的なものの分厚い層は次第に見出しづらくなっていく。社会的なものが見失われていくのである。これが社会学にとって何を意味するのか、しっかり見定める必要があろう。

キーワード：社会学、社会的なもの、統治性、フーコー

## はじめに

本稿は社会的なものの系譜をフーコーの「統治性 (gouvernementalité)」の概念と相即的に記述する試みである。

よく知られているように、「社会学 (sociologie)」という言葉は、オーギュスト・コントが1839年に、ラテン語の「社会 (socio)」とギリシア語の「学 (論理)」を意味する「logie」を結合させることで作り出された新しい学問の名称である。とはいえ、現在、アカデミックな社会学の名のもとに理解される対象や方法とはかなり異なるものだった。主著である『実証哲学講義』にしても、アカデミックな実証主義とは違って産業革命に伴ってその相貌を現し始めていた産業社会を人間の進歩という観点からいかに理解するかという問題意識に貫かれていた(三段階の法則)。晩年コントは「人類教」という新宗教を提唱するが、終始在野の存在だったコントの「社会学」も宗教的色彩が強かった。同時代のフランスで経営者と労働者が一体となった産業社会を構想したサン＝シモンの空想的社会

主義とも共通点を持っていた。

宗教的情熱に裏付けられた在野の知的探求として出発した「社会学」はいかにして社会的なものを発見したのか？ 本稿はいわゆる社会学史をフーコー的視点から見直す試みのきわめてラフなスケッチである。詳細な展開は多くの資料分析を伴うこともあり、本稿以降の課題としたい。

## 1. 統治性の誕生と社会的なものの発見

フーコー的な視点からの社会学史の記述ということになると、社会学の言説分析を考えてしまうが、それはもちろん一部として含むものの、この企図のねらいはやや異なっている。

この試みの前提ないし補助線としてフーコーの統治性研究について考えてみたい。統治性については、コレージュ・ド・フランスの1978年および1979年の講義に限られていて、この講義録が公表されることによって、知られることとなった(Foucault 2004a, 2004b)。

1978年の講義は「安全・領土・人口」と題して、

13回行われた。はじめの3回で18世紀における「安全装置」の出現が述べられる。4回目に国家統治の問題が16世紀に出現したことが述べられ、5回目以降、古代ギリシアおよびキリスト教の司牧権力に遡って統治概念の歴史が分析され、再び16世紀に戻り、「国家理性」と「ポリス」が論じられる。1979年の講義は前年度を受けつつも18世紀の「市場」の発見に注目する。さらに「市場の統治」というテーマにシフトし、現代の新自由主義の問題が扱われる。特に西ドイツのオルド自由主義に焦点が合わされる。こうしたフーコーの分析のねらいは必ずしも明確ではないが、この後、近代の統治性の問題に立ち戻ることはなかった。

1978年講義では「国家理性」と「ポリス論」に収斂していくが、これは18世紀には「警察学」や「官房学」につながり、行政学の源流となっている。その目的は、富国強兵を実現するために、国民の生活水準を向上させ、税収の増加や人心の掌握を図ることにある。他方、1979年講義では「市場の統治」であるが、これは言うまでもなく経済学に接続している。

しかしながら、フーコーの2年間の講義でミッシングリンクとなっているのは18世紀および19世紀の統治性である。まさにこの時期に「社会的なもの」が発見され「社会学」が誕生したのである。「社会的なものの統治」はどのように考えればいいのか。この点についてはフーコーの方法と諸概念を前提にしつつ、独自に社会学の言説をたどり直すほかない。

19世紀前半のフランスの時代背景を考えてみよう。1789年のフランス革命によって政治制度は大きく変貌した。19世紀前半は政治的にはナポレオンの台頭と失脚、王制復古といったジグザク過程をたどりつつ、他方で産業革命が進行する。こうして、1848年の2月革命に至る。この革命についてアレクシス・ド・トクヴィルは次のように述べる。「民衆はまず、すべての政治制度を変えることを通じて、相互に支え合っていこうとしたのである。しかし政治制度をいくら変えても、自分たちの境遇は少しも変わらないか、変わったとしても彼らの欲求のさし迫った状況からすると、まったく耐え難いほどわずかであることがわかったの

だ。こうして、ついに民衆はいつの間にか、自分たちをその地位に閉じ込めておくのは、政府の組織などではなく、社会自体を成り立たせている不変の法則であることを、不可避的に発見した」(Tocqueville 1850: 132)。

市民革命によって政治制度は変わったものの、人々は自分たちの境遇が少しも変化しないことに気が付いた。何が問題なのか、こうして「社会的なもの」が発見されたのである。

この「社会的なもの」はまず階級の問題に顕現され、諸々の社会主義思想に引き継がれた。また、19世紀後半にデュルケームによってアカデミズムの世界で市民権を得た社会学はこれを「分業と連帯」の問題として定式化した。近代社会では人びとがますます個人的になり多様な職業に就くにもかかわらず、ますます緊密につながっているのはなぜか。つまり分業しつつ連帯していることが「社会的なもの」として見出されたのである。

ヴェーバーは合理化の過程として近代社会をとらえようとした。しばしばヴェーバーとデュルケームは方法論的个人主義と方法論的集合主義の対立として、社会学における2つの対立する流れとしてとらえられる。確かに、そのような側面もあるが、フーコーの「統治性」の観点からみるとある種の共通性がみられる。「社会的なものの統治」は拘束性ないしある種の制限をもたらすが、デュルケームはこれを外在的拘束ととらえ、社会学的方法の規準としたが、ヴェーバーは内在的拘束とみて、内面的合理化の過程ととらえたのである。

ちなみに、フーコーも統治の合理性の問題に触れている(Foucault 2004b)。フーコーは合理性の体制として2つのものがあると考えている。すなわち、*véridiction* (真理を語る審級)と*juridiction* (法を語る審級)である。フーコーが記述しようとしたのは、*véridiction*と*juridiction*の間に交差する無数の関係という歴史における根本現象である。「社会的なものの統治」もまたそうした統治の合理性のひとつである。

## 2. 社会問題としての社会的なもの

「社会的なもの」が問題として認知され社会学

のアカデミックな場が確立する前から、アメリカではキリスト教の影響から社会問題の認知とその解決のための社会調査が求められていた。そのため、フィールドワークを重視した実証主義的要請が強かった。20世紀初頭に形成されたシカゴ学派は、「社会的実験室」としての都市シカゴの現実を前に、まず調査によってデータを集めることを優先した。

20世紀においてアメリカ社会学は実に多様な学派を形成し多くの社会学者を輩出したが、社会的なものの系譜という観点から注目したい社会学的言説として、クーリーのコミュニケーション、マートンの中範囲の理論、ミルズの社会学的想像力を挙げておく。

クーリーは学部時代に工学の学士号を取得しているが、卒業後、公務員として働きつつ調査や統計データを扱うようになる。その後大学に戻り、「交通の理論」でミシガン大学から経済学博士の学位を取得する。しかし、大学で担当するようになった講義は「社会学」であった。「交通の理論」は「交通」の経済的政治的意義を研究するものであったが、それは交通のもつ機能を有機的全体の観点からとらえようとするものだった。しかし、クーリーの「有機体」はスペンサーなどヨーロッパ産の社会有機体論とはかなり異なるものだった。彼は「交通」と「コミュニケーション」を同じ社会的メカニズムとみなした。「交通」がコミュニケーションの一部だというのではなく、逆に「コミュニケーション」が交通との類似性によって有機的にとらえられるというのである。ここからクーリー独自の「社会と個人」の捉え方が導かれる。「社会と個人」は対立するものでも全体とその要素といった関係でもない。同じものの別の現れだということになる。社会の中に個人が存在すると同時に、個人のなかに社会が存在する。このようなとらえ方を可能にするものが「コミュニケーション」である。「鏡に映った自我」というクーリーの有名な言葉はコミュニケーションが個人と社会の相互内在を可能にするものだとすることを示すものではないだろうか。

次に、マートンの中範囲の理論は理論の側から実証に近づく試みと言えよう。調査を通じて得ら

れた経験的事実（経験的一般化命題）から抽象的な理論仮説をみちびき、その理論仮説を他の調査でえられた経験的事実をつうじて実証しようというのがマートンのスタイルである。彼はこのようにしてえられる理論を中範囲の理論（middle range theory）と呼んだ。これは検証不可能な誇大理論ではなく、だからといって調査に密着した作業仮説の寄せ集めでもない、検証に裏付けられていると同時にある程度の一般的見通しを持った理論である。このような意味で、マートンの中範囲の理論は、「社会的なもの」の理論面での反映と考えられる。マートンは準拠集団論、自己成就的予言、潜在的機能、官僚制の逆機能、アノミー論など多岐にわたる社会学的貢献を残しているが、中範囲の理論は現在も理論的営為の中で活用され、多くの中範囲の理論を生み出している。

また、社会学的想像力とはライト・ミルズ（Charles Wright Mills）が自著のタイトルにつけた用語で、社会学的分析における批判的な力（＝分析力）のことである。クリティカル・シンキングとも言えるが、ミルズ流に理解すると、社会学上の認識には、社会階級的な権力が投影されていることについて自己反省的になることが、より強調されている。ミルズ自身の言葉を引用すると

「私たちの時代の重要な問題を提示して解決するためには、複数の学問分野からデータ、概念、方法を選ぶ必要がある。関心を持った問題をはっきりさせるためにデータと観点を使うために、一人の社会学者が「学問分野をマスターする」必要などない。専門は、学問の境界線によってではなく、主題とする「問題」によって分化すべきである。」（ミルズ 2017: 243）。

社会学的想像力とは、個人と社会との結びつきを社会構造の中から理解する力のことである。普段の生活の中で私たちは“社会構造”や“歴史”などをことさらに意識することはない。しかし意識することはないにしても、確かに私たちは様々な社会構造の中で生活しており、その構造は私たちの行動を規定しているのである。ライト・ミルズの社会学的想像力とは、文字通りにはグラント・セオリー（T・パーソンズ（Talcott Parsons, 1902-1979））とラザスフェルドの抽象化された経験主義

からの両方からの距離をとるという立場をとるために使われる想像力（構想力）のことである。ミルズの社会学的想像力もまた「社会的なもの」の社会学的言説における実践と言っているだろう。

### 3. カルチュラル・ターンと文化的なもの

20世紀になってソシュールの『一般言語学講義』が出版され、言語を構造的に捉えるようになると、言語を基盤に世界の諸事象を把握するような知の組み換えが起きた。これを一般に言語論的転回（Linguistic Turn）と呼ぶ。たとえば、ソシュールからヤーコブソンを介して人類学者レヴィ＝ストロースに至る流れは、人文諸科学に多くの波及効果をもたらした。社会学もまたこの言語論的転回に巻き込まれた部分があるが、社会的なもののあり方をゆさぶるほどのものではない。むしろ注目したいのは、この言語論的転回を前提として20世紀後半に起きた文化論的転回（Cultural Turn）である。これは社会学を震源地としつつ、従来社会的テーマとされてきた多くのものを深い意味での文化の問題に変えてしまった。社会的なものは文化的なものに塗り替えられてしまったのだ。

カルチュラル・スタディーズの源流は、パーミンガム大学現代文化研究センター（CCCS）設立（1964）に遡ることができる。初代所長はR.ホガートであった。研究方針は英国の歴史性や特殊性にこだわりながら労働者階級の文化やアイデンティティについて研究であって、幾分かは新味が感じられるものの、きわめて穏当な社会学的研究を目指していた。

70年代に入って、スチュアート・ホールがCCCS所長を引き継ぐ。ホールは、イギリスの植民地だったジャマイカの出身で、CCCSの研究のメインストリームを、メディア研究、サブカルチャー研究、人種問題に設定した。とりわけ、マスメディアを消費する側に焦点を合わせ、「アクティヴ・オーディエンス論」など、受け手の能動性や創造性に着目する理論的成果を打ち出した。その波及効果は、人文・社会科学の分野におけるカルチュラル・ターン（文化論的転回）をもたらした。

カルチュラル・スタディーズの主な研究対象は、

TVドラマ、アニメ、映画、ポップミュージック、ストリートファッションなど、これまでのアカデミズムでは扱われてこなかったような対象を先端的な理論で分析した。ホールの考えによれば、大衆的で通俗的な文化にこそ、政治経済領域と切り離しえない、エスニシティやジェンダーなどをめぐる不均衡な権力関係が編成される場だからである。ポピュラー文化は、人々を同質化し社会の多様性を奪うのではなく、多様な状況の中で複数の立場がせめぎあい、権力関係の下に意味が編成され続ける場である。

こうして従来は周辺的なものと考えられてきた文化的なものこそ現代社会を解明するための戦略的糸口と捉えられるようになったのである。こうした経緯があるため、社会学とカルチュラル・スタディーズの関係は微妙な点があり、カルチュラル・スタディーズには社会学以外の研究者も多く参入している。

カルチュラル・スタディーズの特徴としては次のような点があげられる。

- (1)カルチュラル・スタディーズは、問題を文化的実践という観点から理解し、それを権力との関連において吟味しようとする。カルチュラル・スタディーズの課題は、権力関係を明らかにし、それが文化的実践にどのような影響を与え、どのように文化的実践を形づくっているかを解明する。
- (2)カルチュラル・スタディーズは、社会的・政治的文脈から切り離された一つの実体として「文化」を研究するのではない。その目的は、文化の複雑さを理解し、文化が表現され、実践される社会的・政治的な文脈を分析することである。
- (3)カルチュラル・スタディーズでは、文化は二つの機能がある。一つは研究の対象であるが、それは同時に政治的な判断や行動の場でもある。カルチュラル・スタディーズは、学術的であると同時に、政治的・実践的な活動であることをめざしている。
- (4)カルチュラル・スタディーズは、日常的な実践における直感的な知識と、普遍的で客観化された形式を持つ知識との分断を乗り越えようとする。観察者と観察される人、情報を得る人と与

える人とは、アイデンティティと利害を共有していると考えられる。

(5)カルチュラル・スタディーズの実践は、現代社会における価値（道徳）判断や、ラディカルな政治行動に関わっている。カルチュラル・スタディーズの伝統とは、中立的で客観的な知識の集積ではなく、社会の変革をめざす批判的な政治行動の伝統である。

イギリスの CCCS が発信源となったカルチュラル・スタディーズは80年代以降、英語圏を中心にグローバルな展開をみせる。アメリカやオーストラリアでもポピュラーカルチャーやサブカルチャーを新たな枠組みで分析する試みが多数登場した。

90年代以降になると、日本や韓国、中国、インドなどのアジア圏でも急速に受容されていった。

2000年代に入ると従来のカルチュラル・スタディーズに飽き足らない新たな理論的展開がみられた。これは大きく3つの理論的展開があるだろう。(1)ポストコロニアル・スタディーズ：植民地独立以降にも残存している植民地主義の研究、(2)サバルタン・スタディーズ：公的場において語りえない人々の研究、(3)クィア・スタディーズ：セクシュアル・マイノリティが置かれた社会的・政治的状況の研究。これらはこれまでのカルチュラル・スタディーズのポピュラーカルチャー研究ではよく見えてこないものであった。

#### 4. 「社会の喪失」と統治不能社会

イギリスの首相であったマーガレット・サッチャーが1987年に女性誌（Thacher 1987）のインタビューに答えて述べていることは、「社会的なもの」を考える上で示唆的である。サッチャーによれば、人々は何か問題が起こるとそれを社会にぶつけてきた。子どもたち何か問題があればそれは社会の責任とみなされる。しかし、そのような社会といったものは存在しない。存在するのは、個々の男と女であり、家族である、というわけである。サッチャーは哲学的意味での社会名目論を主張しているわけではあるまい。もはや社会問題の器となるような「社会」が消失したということではないか。

フーコーが統治性を主題化するにあたって、1978年講義では16世紀～17世紀の絶対主義体制における統治に焦点をあてていたのに、1979年講義ではわずかに18世紀の経済的な市場の出現を述べたのち、いきなり20世紀に飛躍したことにより、統治性について見逃されていた問題が明らかになってきた。確かに、フーコーは新自由主義による「市場の統治」をアクチュアルな問題として提示しようとした。しかし、「社会的なもの」は消失してしまったのか。この点は慎重に考察する必要がある。フーコーの統治性に関する2年間の講義に強い影響を受けた社会学者ドンズロ（Donzéro 1984）とシャマユ（Chamayou 2018）を参照してみたい。

ドンズロは社会的なものは「統治のテクノロジー」の相関物として発明されたと述べ、デュルケムの「連帯」概念に注目する。「連帯概念は、デュルケムをはじめとする社会学者の手で合理化がほどこされたのち、国家の介入とその正当化、また介入の限度を法の脈絡で再規定するさいに援用された。公共サービス（レオン・デュギー）や制度（モーリス・オーリウ）の観念が、連帯の概念からいっさいを引き出しながら展開をとげていく。これらの観念を通じ、国家はいかなる場合に市民の諸特権を侵す権利をあたえられ、また市民はいかなる場合に国家への異議申立を正当化できるかというぐあいに、国家の介入範囲を明示できるようになる。国家は社会連帯の名で、社会進歩の現状とそこから必要となる措置に見合った行動をとることはできても、これをこえる権限はないものとされる」（Donzéro 訳 2020）。

さらに若い世代のシャマユの見解は興味深い。シャマユは「市場の統治」として暴走する新自由主義（ネオリベラリズム）を「権威主義的ネオリベラル主義」と呼ぶ。「ネオリベラル主義の権威主義的な次元は国家権力の領域をはみ出していく。ビジネス界がなんとしても守ろうとしているのは—それがかれらのいう政治を動かすという言葉の意味だ—私的領域の統治の自律性である。統治されることを望まない社会分子があるとしたら、これこそそれにあたる。しかし、自身を統治不能にするのは、他者をより巧妙に統治するため

である」(Chamayou 訳 2022)。「ネオリベラル主義は、市場を統治不能に仕立て上げることで、みずからの地位を統治システムの一部にまで高めた」(Chamayou 訳 2022)。

こうしてフーコーが見出した「統治性」は国家を踏み越え、社会的なものを消失させてしまったのだろうか。社会的なものはかつて中間集団のあり方に顕現されていた。しかし、シャマユーによれば、中間集団に依拠した権威主義的ネオリベラル主義への反抗は困難になっている。しかし、フーコの権力論の前提としてあった「権力のあるところ反抗がある」という命題に戻るとすれば、様々な異議申立や反抗が持続することになる。

#### 参考文献

- Castel, Robert, 2009, *La montée des incertitudes ; Travail, protections, statut de l'individu*, Éditions du Seuil (北垣徹 = 訳, 2015, 『社会喪失の時代—プレカリティの社会学』明石書店)
- Chamayou, Grégoire, 2018, *Une généalogie du libéralisme autoritaire*, (信友建志 = 訳, 2022, 『統治不能社会—権威主義的ネオリベラル主義の系譜学』明石書店)
- Donzero, Jacques, 1984, *L'invention du social : Essai sur le déclin des pssions politiques*, Paris : Libraire Arthème Fayard, /1994, Paris : Éditions du Seuil (真島一郎 = 訳, 2020, 『社会的なものの発明—政治的熱情の凋落をめぐる試論』インスクリプト)
- Donzero, Jacques, 2006, *Quand la ville se défait ; Quelle politique face à la crise des banlieus?*, Éditions du Seuil (宇城輝人 = 訳, 2012, 『都市が壊れるとき—郊外の危機に対応できるのはどのような政治か』人文書院)
- Foucault, Michel, 1971, *L'Ordre du discours. Leçon inaugurale au Collège de France prononcée le 2 décembre*, Gallimard (慎改康之 = 訳, 2014, 『言説の領界』河出書房新社)
- Foucault, Michel 2004a “*Sécurité, territoire, population*” *Cours au Collège de France 1977-1978*, Paris:Seuil/Gallimard. ミシェル・フーコー (高桑和巳 = 訳) 2007 『安全・領土・人口: コレージュ・ド・フランス講義1977-1978年度』筑摩書房
- Foucault, Michel 2004b “*Naissance de la biopolitique*” *Cours au Collège de France 1978-1979*, Paris: Seuil/Gallimard. ミシェル・フーコー (慎改康之 = 訳) 2008 『生政治の誕生: コレージュ・ド・フランス講義1978-1979年度』筑摩書房
- 市野川谷孝・宇野輝人【編】, 2013, 『社会的なもののために』ナカニシヤ出版
- 厚東洋輔, 2020, 『〈社会的なもの〉の歴史』東京大学出版会
- Thatcher, Margaret, 1987, “Talking to Women’s Own Magazine,” October 31.

## Introduction to the Genealogy of the social and the Governmentality

WATARI Akeshi

〈Abstract〉

According to the French sociologist Donzelot (1982), the social was invented as a technology of governmentality. If so, we should be able to describe the history of sociology at the level of governmentality. This article is a very rough sketch to arrive at this attempt.

Governmentality is a concept of Foucault's middle period, but strangely enough, when something social was discovered and sociology was born.

Foucault makes little mention of the governmentality of the period. The 19th century, when sociology is said to have been born, was the birth.

They are being ignored. Therefore, Foucault's method can be replaced at the level of the social and history, we need to start over. In the middle of the 19th century, the social were recognized as social problems, and they were closely related to socialist thought.

However, it was eventually formulated as a problem that haunts modern society. In the 20th century, American sociologist with the rise of learning, various elements were inserted. However, the thick layer of the social gradually becoming difficult to find. The social is being lost. What does this mean for sociology? It will be necessary to grasp this situation.

Key words : Sociology, the Social, Governmentality, Foucault